「神に召された人々」　　２０２２年8月２８日

ガラテヤの信徒への手紙１：１１～２４

佐々木　佐余子

今朝から「ガラテヤの信徒への手紙」を学びます。この手紙は信仰の真髄が込められており、第二の「ローマの信徒への手紙」とも言われています。ガラテヤはどこにあるかというと、今で言うならばトルコあたりです。パウロは第１回目の伝道旅行でガラテヤ地方に行き福音を宣べ伝えました。ガラテヤと言っても広いのですが、イコニオン、リストラ、デルベあたりです。パウロはイコニオン、リストラ、デルベで主の教会を立ちあげ、そこを後にして、西の方角に伝道旅行を続けたのです。１章の２節を読むと、「ならびに、わたしと一緒にいる兄弟一同から、ガラテヤ地方の諸教会へ」とあるように、この手紙は特定の教会に送られたのではなく、いくつかの都市にある教会に送られた手紙です。この手紙が執筆されたのは紀元５７年頃ですが、第３回伝道旅行の最中でした。

パウロが他の伝道地に赴いている時、偽クリスチャンがガラテヤ地方の教会に入って来て惑わしました。これはパウロにとって重大なことでした。せっかく心血注いで伝えたのに、あろうことか別の違った福音を教えた教師がおり、信徒たちをかく乱していたのです。パウロはがっかりしました。今までの自分の労苦は何だったのだろう。６節ご覧ください。「キリストの恵みへ招いてくださった方から、あなたがたがこんなにも早く離れて、ほかの福音に乗り換えようとしていることに、わたしはあきれ果てています」と言っています。パウロはあきれ果てて、うろたえているのです。パウロのうなだれているような様子が手に取るようです。パウロにとってガラテヤの諸教会はまるで自分の子供のようでした。純真にパウロの教えに聞き従ってきたのに、いとも簡単に乗り換えられてしまった、その驚き。乗り換えられた他の福音とはどのような福音でしょうか。パウロがこれを語るにあたって、パウロの初めからの出自を語ります。パウロが主イエス・キリストによって召されるまでの経過を正直に語ったのです。13 節「あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒としてどのようにふるまっていたかを聞いています。わたしは徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。」この言葉を語るにパウロはどんなに辛く悲しかったでしょう。２０年以上も前のことを話すのです。噂は戸を立てられないと言いますが、パウロのしたことは噂になって遠いガラテヤまで知られていたのです。そのことを隠すことなくパウロは話し出しました。それは神の恵みが豊かであり、このような罪びとに使徒として召し出されたことをガラテヤの人々に証しするためでした。使徒言行録９章にサウロの回心経験が述べられています。「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞きました。クリスチャンを迫害しているのに、主は「わたしを」と言われているのです。クリスチャンを迫害するのは、実に主イエス・キリストを迫害することにパウロは気が付きました。パウロが推定２３歳の頃、イエスの十字架刑をパウロは遠くから見ていたのです。主イエスが復活されてからパウロ自身にも現れてくださったと述懐しています。「この月足らずで生まれた私に現れて

くださった」と言っています。この時、パウロはまだ教会に行っておらず洗礼はうけてなかったのです。そのことを月足らずのわたしに、未熟な私にと表現しています。サウロはアナニアから洗礼を受け、目も元通り見えるようになって元気になり、それ以後使徒として歩むようになりました。15 節に「わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神」と言ってますが、この言い方によると、私たちもそうなのです。わたしたちも母の胎内にある時から選び分かたれているのです。何とうれしいでしょうか。もう生まれる前から選び分かたれているのです。神さまは実に愛の方です。ですから、与えられた人生を神さまに賛美を捧げて感謝して歩みたいと思います。１６節に「すぐ血肉に相談するようなことはせず」とあるので、このころは家族と一緒に生活していたのかもしれないと思いがちですが、そうではなく血肉とは先輩の使徒たち、ペトロや主の兄弟ヤコブやヨハネ、マタイたちを指すのではないでしょうか。エルサレム教会の中心になっていた使徒たちに会うこともせず、ただ一人アラビアに行って祈りの生活をしていたのです。その間１０年の間、準備したのです。アラビアは広いですが、ここではダマスコです。ダマスコはエルサレムから約１８０キロ北にあります。パウロはなぜペトロたちに相談しなかったのでしょうか。普通は後輩として先輩に挨拶したり教えを請うたりするでしょうに。「これからよろしくお願いします」、と言うでしょう。パウロはダマスコに一人退いて黙想の時を持ちました。なぜ、このような自分に主は現れてくださったのか、律法学者として内面的な葛藤に悩んだのです。ユダヤ教徒から一転してクリスチャンに転向するには学者として相当の深い価値観の転換がなければなりません。何故、パウロはクリスチャンになったのか。ダマスコでの１０年間は神の啓示の意味を考え、人に聞くのではなく自力で答えを見出さなければいけなかったのです。でなければとても伝道者として、これからやっていけない、と考えたのです。この劇的な転換。神はご自分の欲する者を召し出し、このように言われます。「あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう」と言われます。すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元通り目が見えるようになって、アナニヤから洗礼を受けたのです。パウロは食事をし元気を取り戻したのです。目からうろこのようなものが落ちるとは、これは比喩で真理に目覚めると言う意味で使われるのです。パウロは真理に目覚めました。古い自我を投げ捨て新しいキリストを着たのです。私たちも教会に行くことによって、少しづつ、古い自我を取り去り、新しいキリストの洋服を着るのです。それがキリスト教のご利益ですね。パウロはすっかり人格が変わりました。１８節を読むとこうあります。「それから三年後、ケファと知り合いになろうとしてエルサレムに上り、十五日間彼のもとに滞在しましたが、」とあります。パウロがエルサレムに行ったのは、主の啓示を受けて、三年もたってからでした。それは個人的な訪問であって、正式にエルサレムの使徒たちから「来て下さい」と言われたわけではなかったのです。その間、パウロの信仰は地固めされて主の召命が確立してからだったのです。パウロはエルサレムに行って主の召命がはっきりしたというのではなく、もうすでにペトロ

に会う前に伝道者としての心備えが明確だったのです。それでエルサレムに行って信仰と伝道の内容を受けたのではないことを示そうとして「それから三年後」と言っているのです。十五日間滞在したとあるので、ペトロと長い友好の話し合いの時があったのではないでしょうか。主の兄弟ヤコブとは、イエスさまの弟ヤコブがその頃実質的にエルサレム教会の指導者になっていたのです。考えてみれば、ナザレのイエスは長男であるにもかかわらず、家のことを弟に任せて神の国を伝えていたのでした。家にも帰らず、それで母のマリアとヤコブ達兄弟姉妹が連れに来たこともあったのでした。ヤコブは兄に対して批判的だったでしょう。そのヤコブがですよ、ちゃんと兄の意志、信仰を次いで母なるエルサレム教会の中心的人物に成長しました。普通は、家族伝道は難しいと言われています。家族だと日頃の実態を見てしまうから、伝道はやりにくいのです。ですからナザレのイエスも言われました。「イエスは自ら、『預言者は自分の故郷では敬われないものだ』とはっきり言われたことがある」と。ヤコブはこの後殉教しています。パウロはここでこだわっています。彼は二番手だから、どうしてもエルサレムの使徒たちから格下に見られやすいのです。それで19節「ほかの使徒にはだれにも会わず、ただ主の兄弟ヤコブにだけ会いました。わたしがこのように書いていることは、神の御前で断言しますが、うそをついているのではありません」と抗弁しています。誰にも指導されずに、教えられて伝道者になったのではないときっぱり言うのです。多分偽クリスチャンがいてパウロの使徒としての権威を疑い、主イエスを迫害した者だから、本当の使徒ではないと吹聴したのではないか、と思うのです。外よりも内輪の方が、敵が多いのです。「わたしの名のためにどんなに苦しまなければならないかをわたしは彼に示そう」とかつての主が仰せになっています。その通りになっていきます。読んでいて気の毒になってきます。その後、パウロは北上しシリア、キリキアに行きます。キリキアのタルソはパウロの生まれたところです。シリアのアンティオキアはパウロの伝道の根拠地なのです。２２節に「キリストに結ばれているユダヤの諸教会の人々とは、顔見知りではありませんでした」とありますが、パウロは全く知らない人達の中に入って福音を宣べ伝えようとしたのです。エルサレムではさすが、伝道しにくいと考えたのでしょう。キリキアはエルサレムから遠く離れていたので気が楽だったのではないでしょうか。そこのクリスチャンたちは教会を迫害した人が今や、福音を告げ知らせている、と驚き、そのような変えられた人を見て、神をほめたたえたのです。

さて冒頭で言ったパウロを困らせた他の福音とはどのような福音でしょうか。それは律法主義の福音です。元来、ユダヤ人は律法をとても大切に考えていたのですが、彼らは律法を通して福音を語ったのです。例えば割礼の問題です。食事の問題です。何を食べていいのか悪いのか、律法を通すとキリストの教えはユダヤ教の一派になってしまいます。何のためにキリストは死なれたのかがあいまいになってぼやけるのです。そのことをパウロは警戒し恐れました。そして、その問題を通してはっきりと、人はキリストを信じることによってのみ救われると説いたのです。この問題はこの後詳しく学べます。それにしても神はただ寝ておられるのではないことがはっきりわかります。歴史上で必要な時に人を起こしてくだ

さるのです。パウロがそうですね。パウロは律法の専門家ですから、律法の弱さを知っていたのです。そういう人を神はここぞとばかりに起用しました。教父アウグスティヌスもそうです。彼がいなかったらキリスト教は異端攻めにあって崩れたでしょう。ルターもそうです。彼がいなければ教会は堕落の身に落ちたでしょう。その他の宗教改革者カルバンと言ったら悪いけれど、彼はアメリカの植民地の信仰的な祖となりました。ただ、アメリカはかつての世界を引っ張る国ではなくなってしまいました。斜陽のアメリカです。

　どんな状況でも週の初め、礼拝を献げる人は神に召された人です。神は一人一人名前を呼んで招いてくださっているのです。礼拝に出ることによってずれたねじが、巻き戻されていくのです。人が生活する上でとても大事な時間です。